

県道柳川筑後線関係埋蔵文化財調査報告

津島福市遺跡

- 筑後市大字津島所在遺跡の調査 -

福岡県文化財調査報告書 第 267 集

2018

九州歴史資料館

県道柳川筑後線関係埋蔵文化財調査報告

津島福市遺跡

- 筑後市大字津島所在遺跡の調査 -

福岡県文化財調査報告書 第 267 集

2018

九州歴史資料館

序

本報告書は、平成26年度に県道柳川筑後線建設に伴い福岡県県土整備部八女県土整備事務所の執行委任を受けて発掘調査を行った、筑後市大字津島字福市に所在する津島福市遺跡の発掘調査報告書です。

津島福市遺跡では縄文時代早期の押型文土器と弥生時代前期末～中期頃の弥生土器や甕棺片、古墳時代～戦国時代までの遺物、江戸時代の溝が出土し、津島地区の歴史のさらなる解明につながる資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、八女県土整備事務所や筑後市教育委員会の関係諸機関の方々に御協力・御助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成30年3月31日

九州歴史資料館

館長 杉光 誠

例　言

1. 本書は県道柳川筑後線建設に伴い、平成 26 年度に九州歴史資料館が発掘調査を実施した、福岡県筑後市大字津島字福市に所在する津島福市遺跡の記録である。
2. 発掘調査および報告書作成は福岡県県土整備部八女県土事務所の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は、坂本真一が行い、遺物写真は北岡伸一（文化財調査室）が行った。空中写撮影は東亜航空技研株式会社による撮影を行った。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は坂本・川述昭人が行い、遺物実測図は坂本と整理作業員が作成した。
5. 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館において、小川泰樹の下に実施した。
6. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
7. 本書に使用した第 2 図は、国土交通省国土地理院発行の 1 /25,000、「羽大塚 八女」を変更したものである。
本書で使用した座標は日本測地系 九州東（Ⅱ）系により、方位は座標北である。
8. 本書の執筆と編集は坂本が行った。

目 次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査・整理の組織	1
II	位置と環境	2
III	発掘調査の記録	4
1	土坑	7
2	溝	11
3	谷	12
4	その他の出土遺物	12
IV	まとめ	18

挿図目次

第1図	筑後市の位置図	1
第2図	周辺遺跡分布図(1/25,000)	3
第3図	津島福市遺跡位置図(1/1,000)	4
第4図	津島福市遺跡全体図・土層図(1/200・1/100)	5~6
第5図	土坑実測図(1/40)	8
第6図	土坑出土土器実測図1(1/3)	9
第7図	土坑出土土器実測図2(14は1/6, 21は1/4, 他は1/3)	10
第8図	溝実測図(1/120・1/60)	13~14
第9図	溝出土遺物実測図1(1/3)	15
第10図	溝出土遺物実測図2(32は1/2, 他は1/3)	16
第11図	谷出土遺物実測図1(1・2は1/4、他は1/3)	17
第12図	谷出土遺物実測図2(28・29は1/2、他は1/3)	18
第13図	縄文土器・石器・石製品・鉄滓実測図(1~15・28・29は1/3, 16~22は2/3、 23~27は1/2)	19

図版目次

- 図版 1 1 遺跡全景（北上から） 2 遺跡全景（西上から）
図版 2 1 遺跡全景（真上から） 2 1号土坑周辺（真上から）
図版 3 1 1号土坑土層（東から） 2 1号土坑土器出土状況 1（東から）
3 1号土坑土器出土状況 2（東から）
図版 4 1 2号土坑土層（北から） 2 2号土坑（西から） 3 3号土坑土層（南から）
図版 5 1 4号土坑土層（東から） 2 5号土坑（西から） 3 ピット 1（東から）
図版 6 1 1～3号溝（東から） 2 1～3号溝（西から） 3 1～3号溝（西から）
図版 7 1 1号溝土層（西から） 2 2号溝土層（東から） 3 3号溝土層（東から）
図版 8 1 谷（西から） 2 谷（東から） 3 谷土層（西から）
図版 9 1号土坑出土土器
図版 10 土坑・溝・谷出土土器
図版 11 谷出土土器
図版 12 繩文土器・石器・石製品・土製品



調査前風景

I はじめに

1 調査に至る経緯（第1図）

福岡県筑後市大字津島では平成 25 年 11 月 26 ～ 29 日、筑後市教育委員会により県道柳川筑後線に関わる試掘調査が行われた。その結果、数箇所にわたり遺構が検出された。

九州歴史資料館では、平成 26 年 9 月 10 日に教育省総務部文化財保護課、筑後市教育委員会、県土整備部八女県土整備事務所と 4 者で、本調査の取り扱いについて協議した。その結果、稲刈り後の 10 月以降に筑後市教育委員会に替わって、九州歴史資料館が本調査を実施することとなった。本調査は平成 26 年 10 月 20 日～ 12 月 26 日の約 2 ヶ月に渡って実施した。



第1図 筑後市の位置図

2 調査・整理の組織

平成 26 年度の発掘調査と 29 年度の整理・報告に関わる関係者は次のとおりである。

	平成 26 年度	平成 29 年度
福岡県八女県土整備事務所		
所長	中尾 格	荻島清隆
道路課長	本庄村治	梅崎 直
県道建設係長	三瀬昭雄	坂井健太郎
技術主査	橋爪博紀	古賀達哉
福岡県教育委員会		
教育長	城戸秀明	城戸秀明
教育次長	西牟田龍治	吉田法稔
総務部長	川添弘人	辰田一郎
九州歴史資料館		
館長	杉光 誠	杉光 誠
副館長	伊崎俊秋（兼副理事）	飛野博文
総務室長	塩塚孝憲	田嶋朋子
総務班長	山崎 彰	中村満喜子
事務主査	南里成子	林田朋子
	宮崎奈巳	
主任主事		原野貴生

主任主事	秦 健太
主事	秦 健太
文化財調査室長	飛野博文
文化財調査室長補佐	吉村靖徳
文化財調査班長	吉村靖徳
文化財調査班長	秦 憲二
参事補佐	伊崎俊秋
主任技師	秦 憲二
調査補助員	小川泰樹 (整理)
	坂本真一 (調査)
	川述昭人

教育庁総務部文化財保護課

技術主査 坂本真一 (報告)

発掘調査にあたっては、発掘作業員の方々を始め、筑後市教育委員会や多くの方々のご協力によって円滑に進めることができました。ここに記して感謝いたします。

II 位置と環境

津島福市遺跡の所在する筑後市は、福岡県南部の筑後平野中央部に位置する。北は久留米市、南はみやま市、東は八女市、八女郡広川町、西は三瀬郡大木町と接する。北から南にかけて八女台地のなだらかな傾斜地が広がり、人工灌漑河川の山ノ井川、花宗川が流れている。また南には矢部川の自然堤防や川の堆積による三角州性低地が広がり、クリーク網が発達し、温暖で肥沃な土壤や豊かな水を利用した農業が盛んな都市である。人口は約5万人（市ホームページによる）、市の中心部には九州新幹線・鹿児島本線、国道209・442号線など主要な交通網が巡っている。

津島福市遺跡では、主に縄文時代早期と弥生時代前期末～中期にかけての遺構が検出されている。そのため、ここではこれらの時期の周辺遺跡について詳述する。

筑後市内では筑後市郷土研究会の調査による縄文時代早期で有名な裏山遺跡がある。ここでは石組炉として使用されたと考えられる焼石を検出し、縄文時代包含層内から押型土器、打製石器、石棒が出土している。裏山遺跡と本遺跡の間には志西田遺跡、志西野々遺跡、志前田遺跡でも同時期の遺構・遺物が確認されている。

志西田遺跡では縄文時代の落とし穴状遺構2基が検出されている。また志西野々遺跡では石組炉と考えられる土坑、志前田遺跡では縄文時代早期の石組炉2基が検出されている。いずれも小規模の調査だが、これら3遺跡の間では縄文時代の広がりを想定している。

弥生時代では常用長田遺跡、常用日田遺跡、志五反田遺跡、津島皿ヶ町遺跡、津島野内遺跡、津島餅町遺跡、津島北石伏遺跡が挙げられる。筑後市教育委員会の調査によれば、常用地区では常用長田遺跡で前期後半～中期前半の土坑、常用日田遺跡で前期後半～中期前半の竪穴住居・土坑・井戸が確認されている。津島地区では中期後半には津島皿ヶ町遺跡で掘立柱建物跡、津島野内遺跡では中期後半～後期の甕棺墓・竪穴住跡が検出されている。これらの遺跡から弥生時代前期～中・

後期に低位丘上から低湿地へ移行する集落の展開が想定されている。

古代～中世では志上婦計遺跡、尾島前田遺跡で土坑や、溝を検出し、それらに伴う須恵器、土師器、陶磁器片が出土している。その他にも採集遺物であるが、志西田遺跡で丸柄石帯1点が確認されている。近世では志下婦計遺跡で溝やピットが検出されている。周辺では所々で古代～近世にかけての調査が行われているが、小規模調査のため遺跡の全容は把握できておらず、詳細不明な点が多い。今後の調査で明らかにされると思われる。

なお、それぞれの遺跡の詳細については筑後市教育委員会発行の報告書を参考にして頂きたい。

(参考文献)

筑後市教育委員会 1966『裏山遺跡 調査概報』

筑後市教育委員会 1999『筑後西部第2地区遺跡群(Ⅰ)』筑後市文化財調査報告書第21集

筑後市教育委員会 2000『筑後西部第2地区遺跡群(Ⅱ)』筑後市文化財調査報告書第26集

筑後市教育委員会 2000『筑後西部第2地区遺跡群(Ⅲ)』筑後市文化財調査報告書第27集

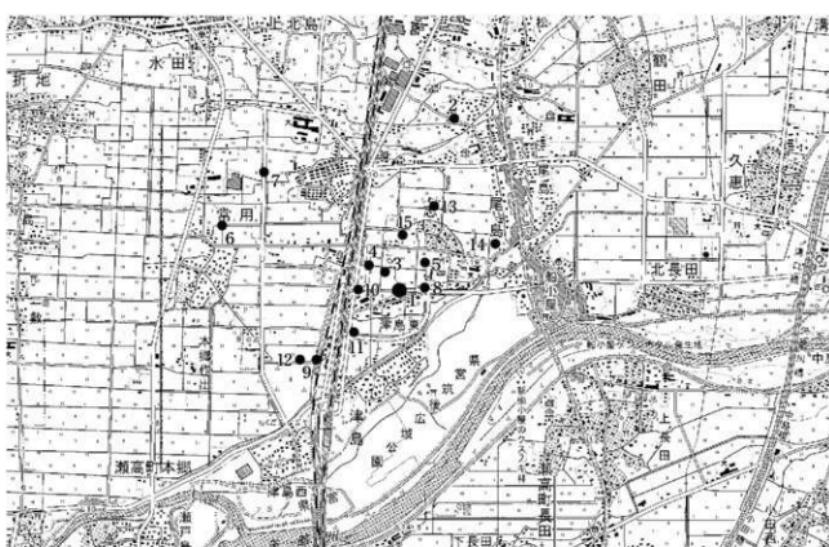
筑後市教育委員会 2003『筑後西部第2地区遺跡群(Ⅳ)』筑後市文化財調査報告書第51集

筑後市教育委員会 2004『筑後西部第2地区遺跡群(Ⅴ)』筑後市文化財調査報告書第57集

筑後市教育委員会 2009『九州新幹線関係遺跡』筑後市文化財調査報告書第89集

筑後市教育委員会 2010『志五反田遺跡』筑後市文化財調査報告書第92集

筑後市教育委員会 2015『志五反田遺跡Ⅱ』筑後市文化財調査報告書第111集



- | | | |
|----------|-----------|------------|
| 1 津島福市遺跡 | 6 常用長田遺跡 | 11 津島餅町遺跡 |
| 2 裏山遺跡 | 7 常用日田遺跡 | 12 津島北石伏遺跡 |
| 3 志西田遺跡 | 8 志五反田遺跡 | 13 志上婦計遺跡 |
| 4 志西野々遺跡 | 9 津島皿ヶ町遺跡 | 14 尾島前田遺跡 |
| 5 志前田遺跡 | 10 津島野内遺跡 | 15 志下婦計遺跡 |

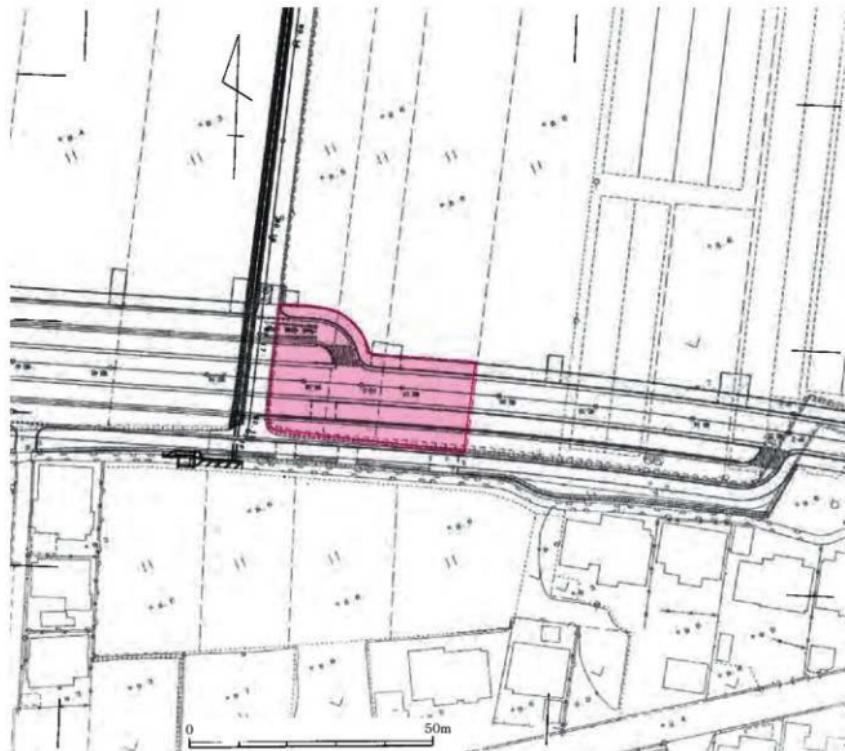
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

III 発掘調査の記録

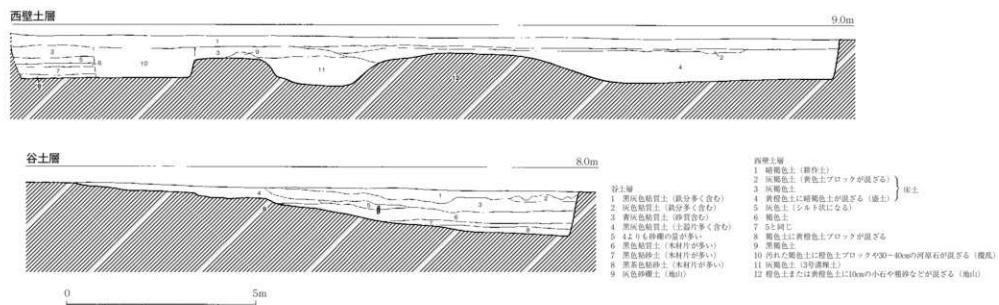
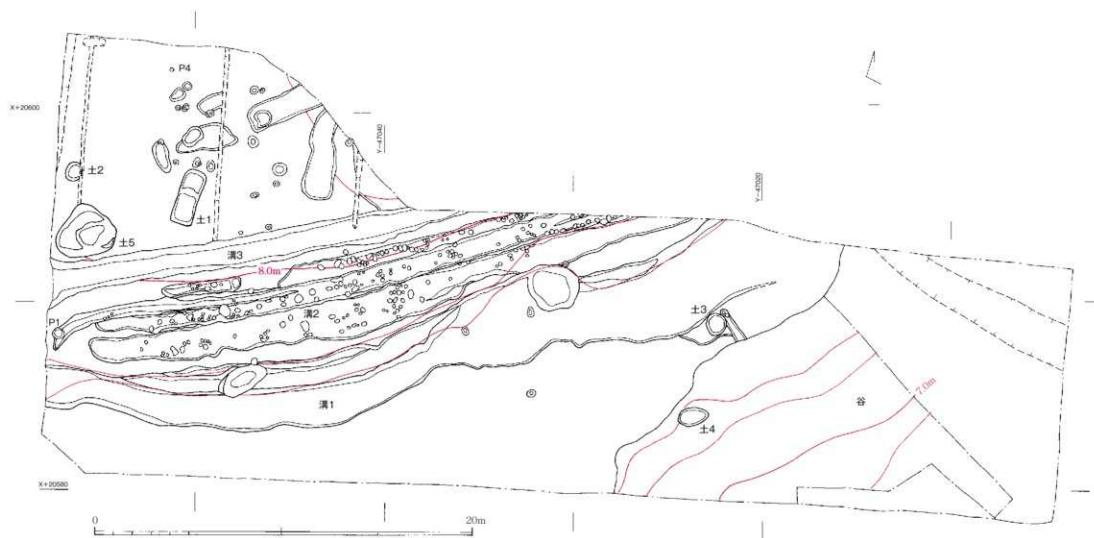
津島福市遺跡は、周知の包蔵地である志西野々遺跡の南側に位置する。調査区西壁の土層観察から、調査区北側で一部攪乱されるが、上層から暗褐色土（耕作土 深さ0.2m）、灰褐色土（床土 深さ0.1m）、そして黄橙色土と暗褐色土が混ざった盛土が、約0.1～0.8mの深さで旧地形に沿って堆積する。土坑やピット検出した北側は橙色土や黄橙色土（地山）の遺構面まで、浅い所で深さ約0.5mで達する。溝を検出した南側も一部攪乱されるが、耕作土や床土下には盛土はなく、灰色土や褐色土が約0.1～0.2mの厚さで堆積する。地形は北から南や南東側の谷に向かって、なだらかに下がっていく状況である。北側の一一番高い所で標高8.2m、谷の最下面では標高6.2mを測る。

調査区は一度に掘削できなかつたので、まず南東側の谷の手前までを平成26年10月20日から調査した。調査区を掘削した排土は八女県土整備事務所の協力により、北側の借地部分に仮置きができたおかげで、調査を迅速に進められた。11月17日の反転後は谷部分の調査を再開し、12月26日まで調査区を埋戻して終了した。

なお、遺構は北側に集中し、土坑5基、溝4条、谷を検出した。遺物は縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器・内黒土器・瓦器・土師質土器・青磁・磁器・石製品など縄文時代から江戸時代までの幅広い時期の遺物が出土した。



第3図 津島福市遺跡位置図 (1/1,000)



第4図 津島福市遺跡全体図・土層図 (1/200・1/100)

1 土坑

1号土坑（第5～7図 図版3・9）

調査区北西側に位置する。長軸2.95m、短軸1.2mを測り、長方形状である。短軸側の断面は逆台形状で北側は0.15mと浅いテラス状になり、南側に向かってさらに0.25m深くなる。この南側の中央部分に甕棺片や弥生土器の甕片が集中して出土した。埋土は黒色土と橙色土が混ざって堆積していた。出土土器以外にも、第13図26の砥石も出土した。

出土土器

1～14は弥生土器である。1～3は壺片である。1は素口縁である。2は断面逆L字形を呈する平坦口縁で、外面頭部に沈線が2条巡る。調整は沈線下に刷毛目と内外面とも指頭圧痕が残る。3は平底の壺底部片である。調整は外面にミガキと刷毛目、内面にはナデを施す。4～13甕片である。4は僅かに如意形を呈する口縁で、口径21cm、器高20.5cmを測る。調整は外面刷毛目であるが、底部は刷毛目をナデ消す。内面はナデであるが、所々に指頭圧痕が残る。5・6・8は断面三角形の口縁で、口縁下に突帯がつく。7のみ体部中程で最大径をとり、口縁と突帯に刻目を施す。9はやや小型の甕片で、口縁端部が僅かに三角形状を呈する。復元口径13.0cmを測る10～13は甕の底部片で、いずれも上げ底である。10は5と接合する可能性がある。12のみ穿孔を施す。14は弥生時代前期末頃の甕棺片である。口縁部は肥厚し、2段の刻目を施す。底部片は出土していない。復元口径75.6cmを測る。いずれの調整は外面に刷毛目、内面ナデや指頭圧痕を施す。

2号土坑（第5・7図 図版4）

1号土坑の西側に位置し、上面は現代の溝に切られている。径約1mの円形状で、深さ0.3mを測る。埋土は黒色土と焼土が混ざり、中から土師器片と13図28・29の碗形滓片が出土した。

出土土器

15・16は土師器の椀で、復元口径11・16.4cmを測る。17は土師質羽釜片である。

3号土坑（第5・7図 図版4・10）

調査区東側の谷部に位置する。径約1～1.15mのやや長円形状で、深さ0.2mを測る。

出土土器

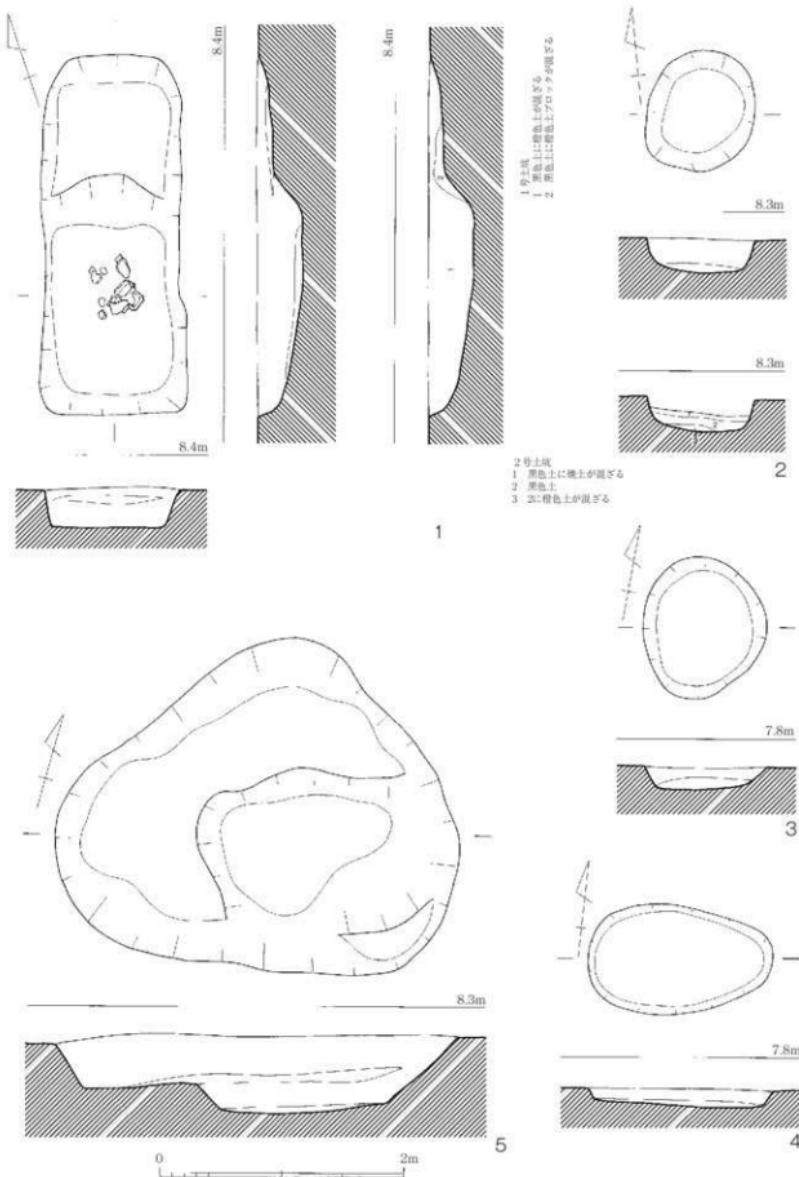
18は内黒土器椀である。内面は黒色で、ミガキを施す。19は土師器椀で、調整は内外面ナデを施す。20は甕片で、断面逆L字状の口径部である。調整は外面に刷毛目とナデ、内面は斜め方向のケズリを施す。21はやや大型な厚手の甕片か。体部中程に把手の接合部が残る。調整は外面に刷毛目、内面はナデを施す。

4号土坑（第4図 図版5）

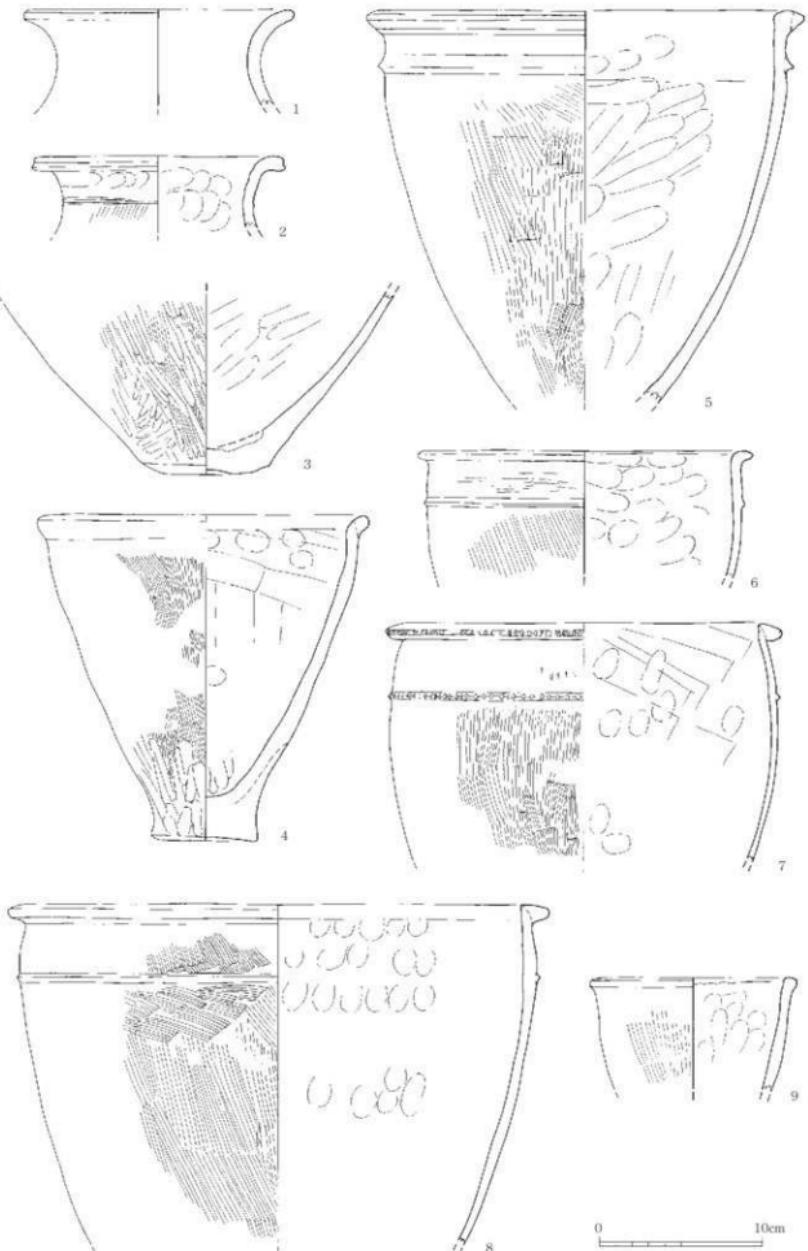
3号土坑の南の谷部上面に位置する。長軸1.5m×短軸0.9mで、卵形を呈す。深さ0.15mと浅い。図化できる遺物はなく、時期は不明である。

5号土坑（第5・13図 図版5）

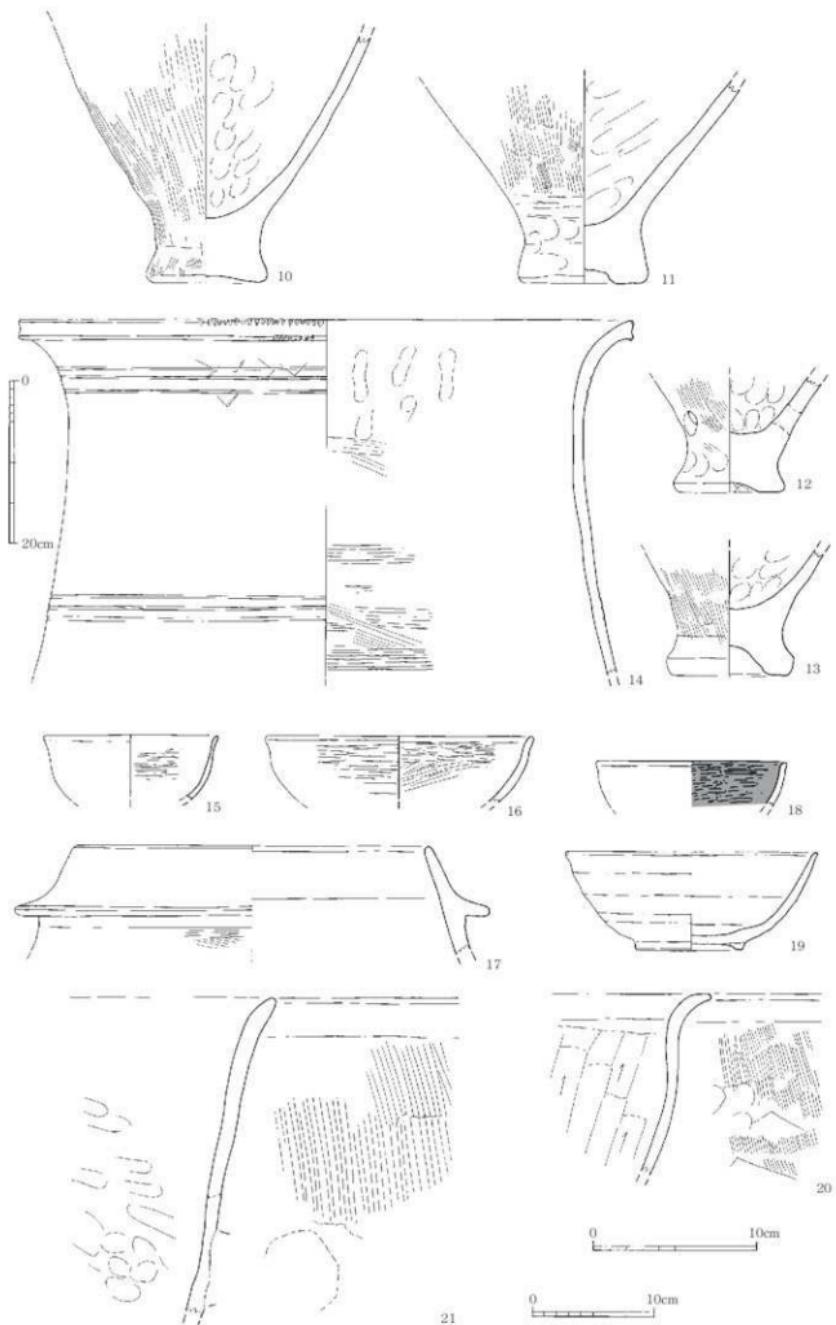
2号土坑の南側に位置する。隅丸三角形状で、南北軸で2.7m×東西軸で3.3mを測る。深さは



第5図 土坑実測図 (1/40)



第6図 土坑出土土器実測図1 (1/ 3)



第7図 土坑出土土器実測図2 (14は1/6、21は1/4、他は1/3)

G L から 0.4 m 下で 2 / 3 程がテラス状になり、中央に向かってさらに約 0.2 m 下がる。埋土は逆転しており、縄文土器の押型文片が出土した。縄文時代早期の風倒木痕か。第 13 図 7 と 8 が出土する。

2 溝

いずれの溝も調査区中央を東西に延びる。

1 号溝（第 8・9 図 図版 6・7・12）

1 号溝はいずれも谷の上端に沿うように東西方向に延び、台地と谷との境目で検出した遺構である。谷の一部の可能性がある。2 号溝と一部接するような状況で検出し、中央付近では深さ約 0.4 m の土坑状に凹んでいる。断面三角形状で、残存長約 40 m、幅 1.6 ~ 4 m、深さ約 0.4 m を測る。埋土の上層は灰褐色砂質土、下層は暗褐色土が堆積する。

出土土器

1 は土師器杯片で、外面底部は糸切りである。2 は土師器椀片で、僅かに断面三角形状の高台状になる。3 は土師器壺片で、口縁は逆ハの字状で、復元 14.4cm になる。4 と 5 は内黒土器片である。4 は皿片で口縁端部を欠損する破片である。5 は椀片でこれも僅かに断面三角形状の高台になる。6 は須恵器壺又は甕の体部片である。外面は格子目文で所々、横ナデである。内面は青海波紋状になる。7 と 8 は土師質鉢片である。7 は玉縁状の口縁部片で、内面は刷毛目になる。8 は体部下半片で、内外面に部分的に刷毛目が残る。9 は土師質羽釜の口縁部片で、調整は内外面ナデだが、頸部内面には工具痕片が残る。10 は青磁碗片で、口縁端部で外に開く。11 は滑石製石鍋の体部片である。

2・3・4 号溝（第 8~10 図 図版 7・10・12）

1 号溝の北側で検出し、南側から 2 号溝、2 号溝に接する 4 号溝、2・4 号溝の北側を 3 号溝とした。2 号溝は長さ約 30 m 以上、最大幅約 4 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は暗褐色土に約 10cm の石が混ざる。4 号溝は 2 号溝の一部か。長さ 4.2 m、最大幅 0.6 m、深さ 0.2 m を測る。3 号溝は長さ 22 m、幅 1.5 m 前後、深さ 0.6 m を測る一連の溝であるが、部分的に一度掘り直しが行われている。埋土の上層は灰褐色土に黒色土や褐色土が混ざり、下層は青灰色土である。

2・4 号溝は浅く、底には幅 0.2 m 前後の凹凸痕跡が見られることから、これが歩行痕跡であるならば道路跡の可能性がある。またこの 2・4 号溝に沿うように延びる 3 号溝は側溝などの可能性がある。これらの溝は埋土から近世以降の陶器片が出土しており、近代まで使用されたものと考えられる。

出土土器

12~17 は 2 号溝出土である。12・13 は土師器の杯片と椀片である。14 は土師質カマド片の口縁部片か。他にも破片があるが図化していない。15 は白磁碗片、16 は染付碗片、17 は掲軸陶器の体部片である。外面に把手がつく。18~32 は 3 号溝出土である。18~20 は弥生土器の甕片である。18 と 19 は口縁部より約 3 cm 下に突帯を有し。19 は口縁部と突帯に雜な刻目が入るが、20 は口縁部のみに刻目が入る。調整は 18 と 20 の内外面ともナデで、19 のみ内外面とも刷毛目である。

21と22は弥生土器壺の底部片である。23は弥生土器壺の底部片で、僅かに上げ底になる。外面の調整は、21はミガキで、22は刷毛目で、内面はナデである。23は内外面ともナデである。24と25は高杯の脚部片である。24は大きく脚端部が外に開くが、25は脚部が一度屈曲して、外に開く。調整は24・25はミガキであるが、24の内面は刷毛目である。26は須恵器壺で、底部は欠損する。口縁部は外に開いて尖り、頭部に向かって窄まる。また肩部は撫で肩で、底部に向かって垂直になる。27は須恵器壺又は壺の体部片か。26と27の調整は内外面ナデであるが、外面は叩きである。28は内黒土器碗片である。内外面ミガキである。29は青磁碗の底部片である。30は土師質壺片で、口縁端部は肥厚する。内外面は刷毛目で、口縁端部はケズリである。31は丸瓦片である。32は土錐である。下端は欠損する。

3 谷（第4・11・12図、図版8・10・11）

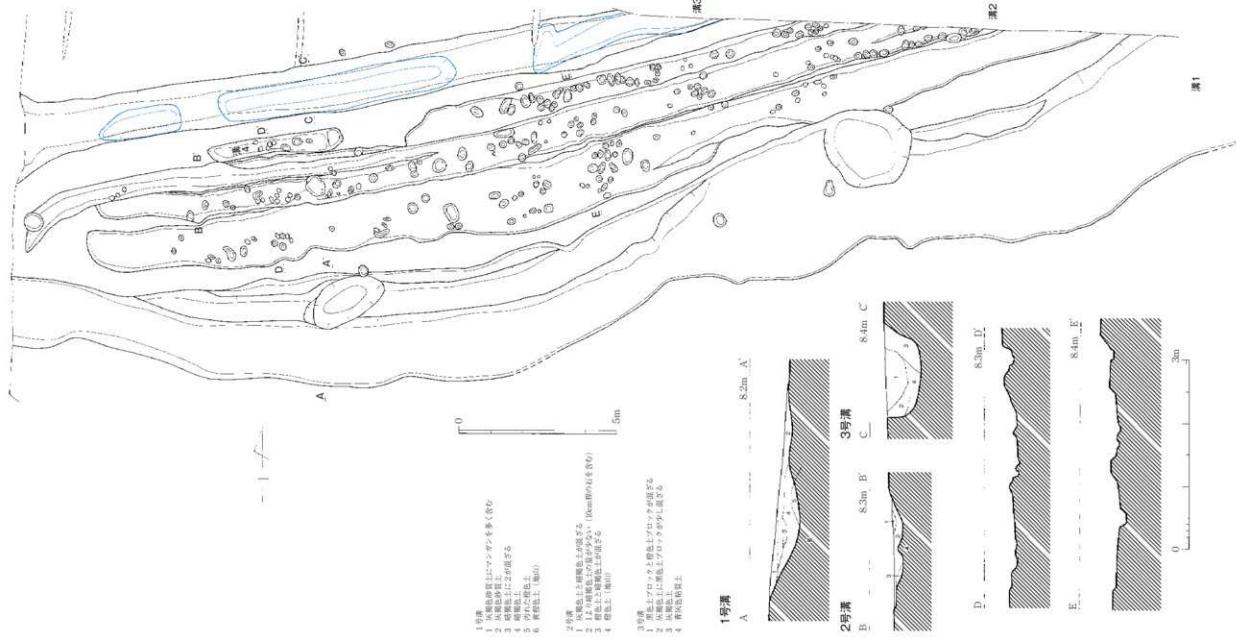
調査区南東側は谷になる。一部、攪乱がトレント状に入る。埋土の上層は黒灰色粘質土や青灰色土粘質土、下層は黒色や黒茶色粘質土が堆積する。地山の灰色砂礫層は東側に向かって深くなり、最も深い所で12m下になる。遺物は古墳時代～戦国時代までの多様な遺物が混入していた。

出土土器

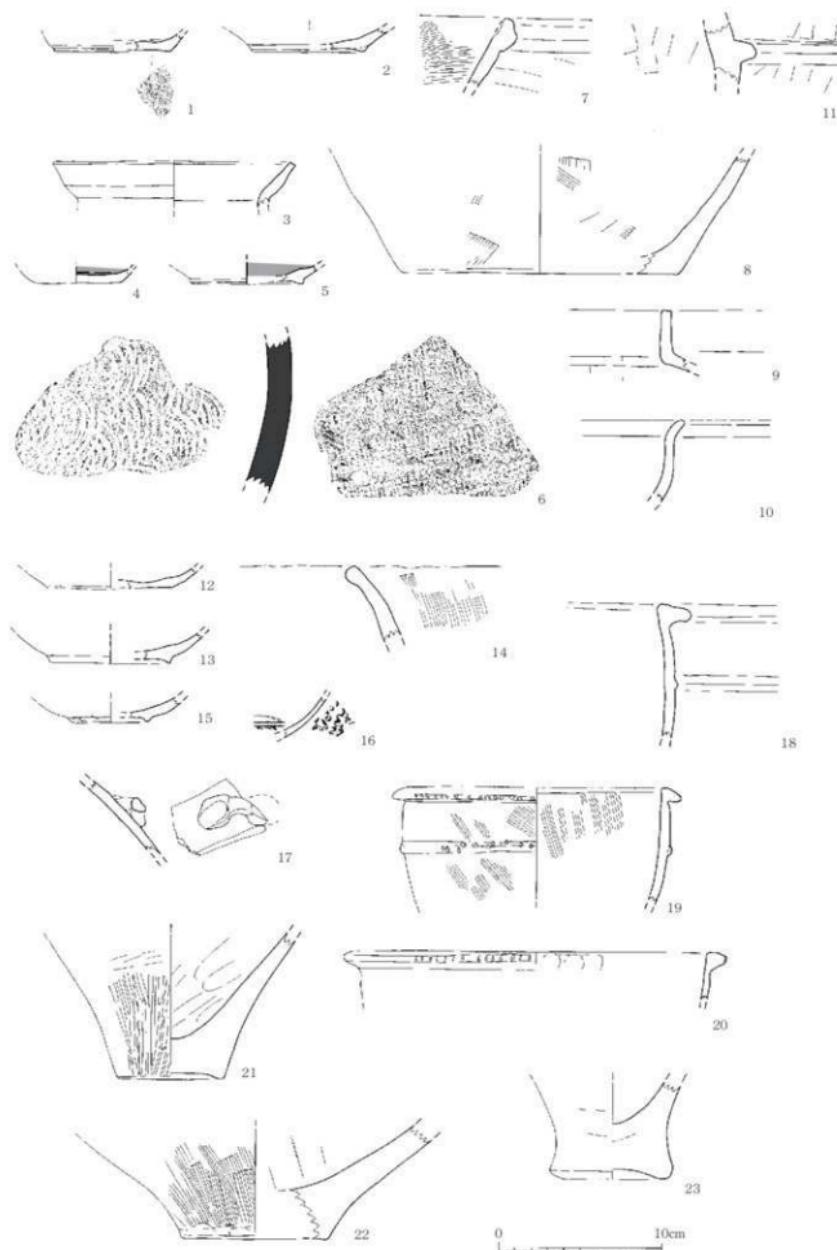
1と2は接合しなかったが、同一個体の長頸壺である。体部上半は欠損するが、底部は丸底である。内外面とも刷毛目で、頭部の内面はナデである。3は長頸壺の口縁部片で、口縁端部が外側に開く逆ハの字形を呈する口縁～頭部中央に沈線が1条巡る。4と5は二重口縁状の小型壺である。4は内外面に刷毛目と体部内面にケズリ、5は底部内面に強いナデを施す。6と7は口縁を欠損する小型の壺片である。8も小型の壺で体部～底部を欠損する。外面と内面の口縁付近はミガキで、それ以外はケズリとナデを施す。9・10は小型の壺である。11はやや外に開く口縁部をもつ。形状からは鉢に近いか。12は底部を欠損する壺片である。外面は刷毛目、内面はケズリである。13と14は壺の口縁～頭部片である。外面は刷毛目、内面はケズリとナデである。15は二重口縁壺片である。16～21は土師器の高杯である。16～19は杯部は浅い。16～19・21の調整は外面に刷毛目で、杯部と脚部との接合部分はナデである。内面は杯部でミガキ、脚部でケズリとナデを施す。20は他と比べて、杯部が深い。体部は外面に弱い稜がつく程度に角張り、そこから口縁端部までは真っ直ぐに開く。21は杯部を欠損する高杯脚部片である。全体的に肉厚で、脚端部は丸みを帯びる。22は器台の脚部片で、脚部上半に穿孔を施す。23は鉢である。脚部は低く、外に大きく開く。24は須恵器壺又は壺の口縁部片である。内外面ともナデだが、外面の屈曲部分から下のみ格子目の叩きが残る。25は須恵器壺又は壺の体部下半片か。外面は格子目叩きを部分的にナデ消しているが、一部のみヘラケズリで角張る。底部は僅かにしか残存していないが、糸切りか。内面は横ナデである。26は薄手に作られた瓦器碗である。内外面とミガキとナデによる調整である。27は僅かに残存していた青磁碗の口縁部片である。外面に連弁を施す。28と29は土錐である。

4 その他の出土遺物（第13図、図版12）

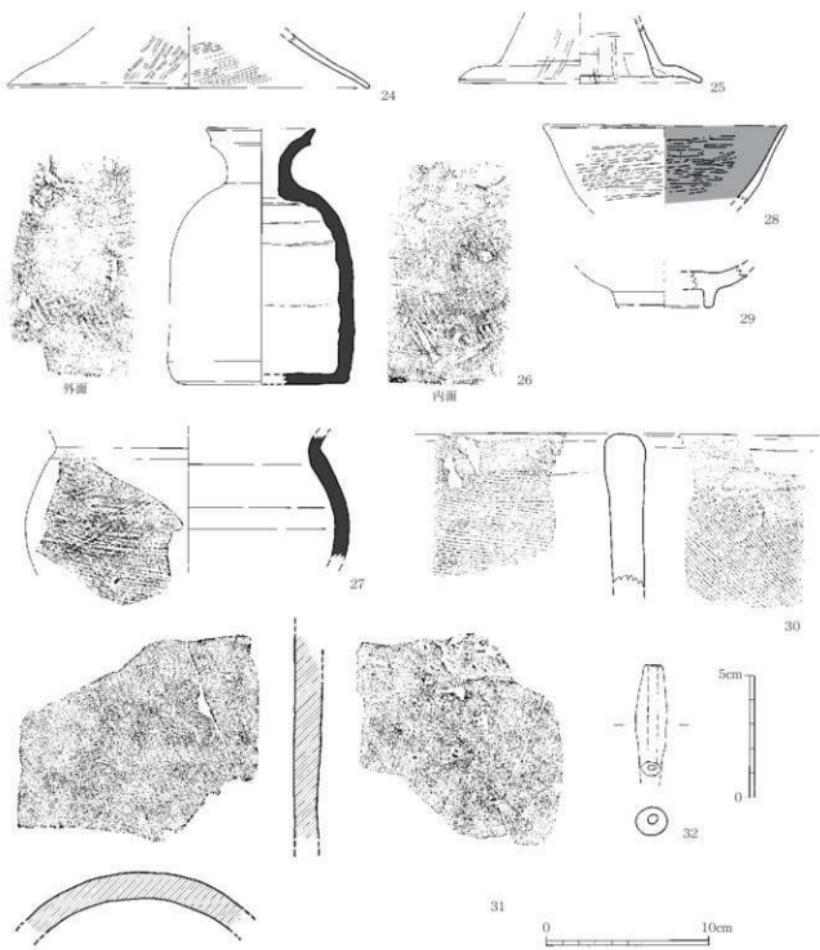
1～13は楕円形文の押型文土器である。1～7は細かい楕円文の早水台式頃で、8～10は粗く大きい楕円文で手向山式頃か。2は穿孔を施す。3・4は原体条痕がつく。3は胎土に黒曜石片が入る。1～5・8は口縁部片である。11～13は山形文である。14は内外面とも条痕文で、口縁部



第8図 滲漏測図(1/120・1/60)



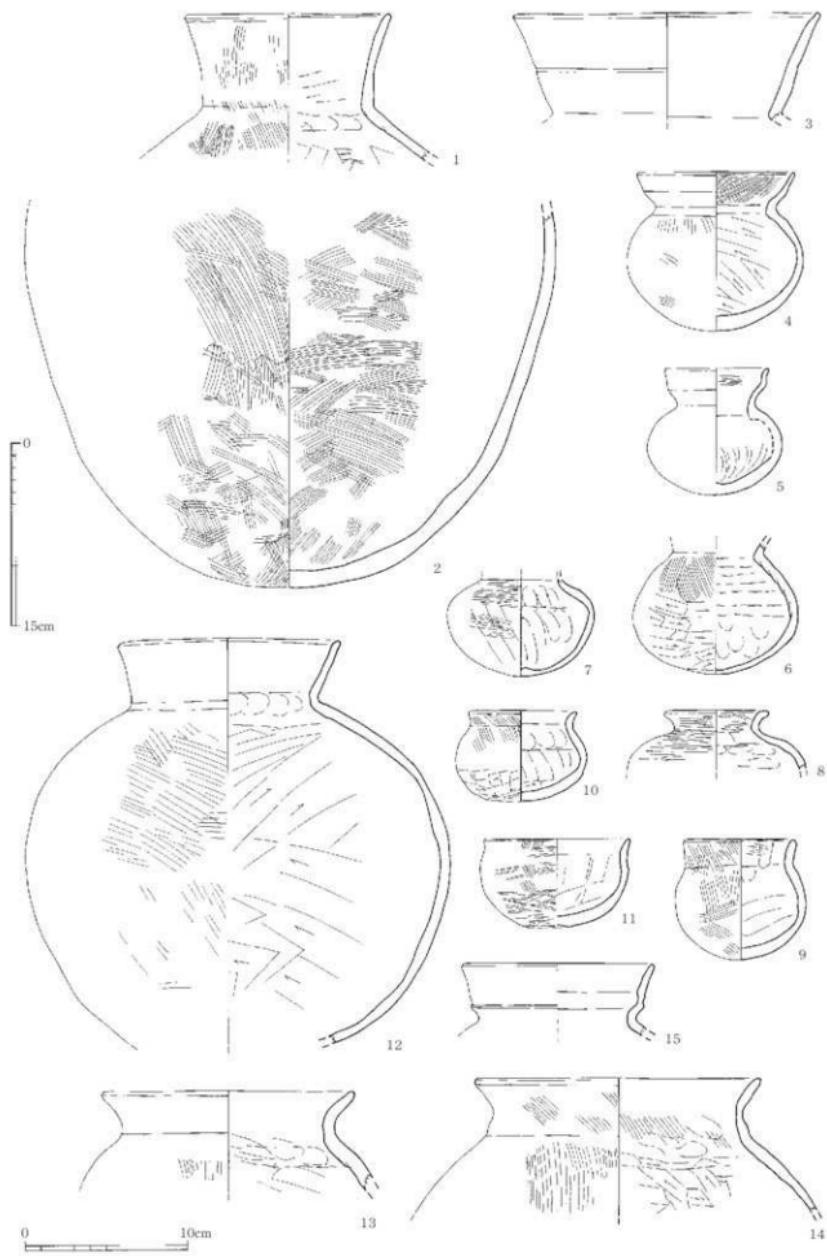
第9図 溝出土遺物実測図1 (1/ 3)



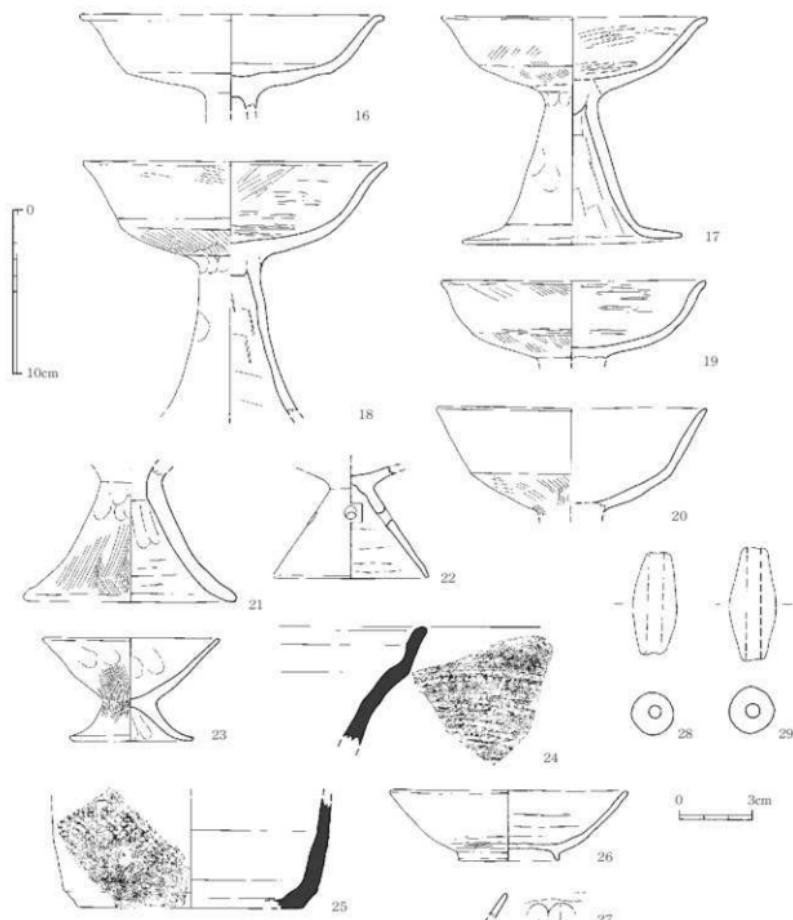
第10図 溝出土遺物実測図2 (32は1/2、他は1/3)

片である。15は外面に撲糸文を施す。内面はナデである。

16～27は石器および石製品である。16～20は黒曜石製の石鎌である。21・22サスカイト製石鎌である。23はサスカイト製の搔器である。24・25は使用痕のある剥片で、24は黒曜石、25サスカイト製である。頂部を打点した剥片で、左右側辺部に僅かに痕跡がある。26は1号土坑出土の粘版岩製の砥石である。残存状況が悪く、破片を組み合わせてようやく一辺の側辺が残る程である。両面を使用したものか。27は砂岩製の砥石で、断面方形で擦痕が明瞭に残る。28・29は2号土坑出土の楕形滓の破片である。重さ151g、131g。



第11図 谷出土遺物実測図1 (1・2は1/4、他は1/3)



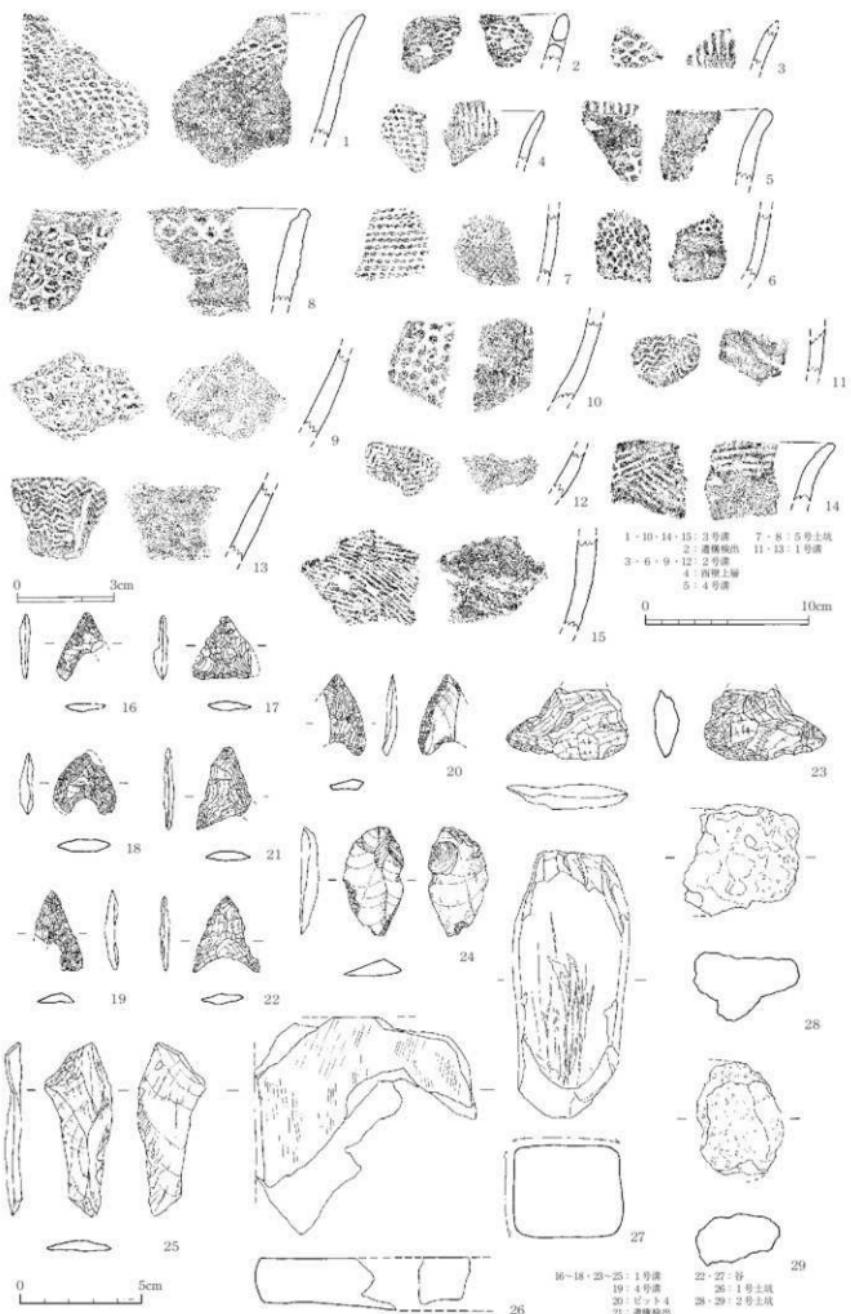
第12図 谷出土遺物実測図2 (28・29は1/2、他は1/3)

IV まとめ

津島福市遺跡では、主な遺構として縄文時代早期の5号土坑、弥生時代前期末の1号土坑、平安時代の3号土坑、室町時代の2号土坑、江戸時代の2・3・4号溝が主な遺構である。それ以外には、遺構に伴うものではないが古墳時代～戦国時代までの遺物が谷で出土した。



2号土坑出土鉄滓



第13図 繩文土器・石器・石製品・鉄滓実測図
(1~15・28・29は1/3、16~22は2/3、23~27は1/2)

縄文時代については、津島福市遺跡の北側では志西田遺跡・志西田野々遺跡・志前田遺跡では縄文時代早期頃の遺構が検出されている。これら3遺跡の間では縄文時代の包含層の広がりを想定しており、本遺跡もこれらの範囲の一部なのかもしれない。

弥生時代では常用長田遺跡、常用日田遺跡、志五反田遺跡、津島皿ヶ町遺跡、津島野内遺跡、津島鮮町遺跡、津島北石伏遺跡が周囲で確認されている。

筑後市教育委員会の調査によれば、常用地区では常用長田遺跡と常用日田遺跡で前期後半～中期前半の遺構が確認されている。津島地区では中期後半には津島皿ヶ町遺跡、津島野内遺跡では中期後半～後期で遺構が検出されている。筑後市教育委員会が指摘した弥生時代前期～中・後期に低位丘上から低湿地へ移行する集落の状況の一つを、本遺跡も僅かであるが示しているとも思われる。

谷からは古墳時代前期の出土遺物が最も多いか、本遺跡ではその時期に該当する遺構は確認できなかった。しかし遺物の残存状況、出土量から周囲にそれらの遺構の存在を推測できるのではないかと思われる。古墳時代以降では、内黒土器を出土した平安時代の3号土坑、土師質羽釜片や鉄滓を出土した室町時代の2号土坑もある。

江戸時代の2・3・4号溝については2・4号溝の底面で検出した小穴や掘削時の埋土の固さから考えると道に残された歩行痕跡で、3号溝は側溝ではないかと考えられる。

本遺跡は各時代に一基程の遺構しかなく、不明な部分が多い。今後の調査に期待したい。

※なお、それぞれの遺跡についての参考文献は、P 3を参照



現在の津島福市遺跡



1 遺跡全景（北上から）



2 遺跡全景（西上から）



1 遺跡全景（真上から）



2 1号土坑周辺（真上から）





1 2号土坑土層(北から)



2 2号土坑(西から)



3 3号土坑土層(南から)



1 4号土坑土層(東から)



2 5号土坑(西から)



3 ピット1(東から)



1 1～3号溝（東から）



2 1～3号溝（西から）



3 1～3号溝（西から）



1 1号溝土層（西から）



2 2号溝土層（東から）



3 3号溝土層（東から）

図版8



1 谷（西から）



2 谷（東から）



3 谷土層（西から）



6-3



6-8



6-4



7-10



6-5



7-13



6-7



7-14





第13圖



縄文土器・石器・石製品・土製品

報告書抄録

ふりがな	つしまふくいいらいせき							
書名	津島福市遺跡							
副書名	県道柳川筑後線関係埋蔵文化財調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第267集							
編著者名	坂本真一							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3							
発行年月日	平成30(2018)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	度数	度数			
つしまふくいいらいせき 津島福市遺跡	ふくおかけんちくごし 福岡県筑後市 つしまふくいいら 津島福市	40211		33° 11' 05"	130° 29' 44"	2014.10.29 ~2014.12.26	約1,000m ²	県道柳川・ 筑後線
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
津島福市遺跡	集落	縄文時代	土坑	5	縄文土器	土師器	内黒土器	
		弥生時代	溝	4	弥生土器	須恵器	瓦器	
		古墳～戦国時代	ピット		石器	石製品	陶磁器	
		江戸時代			磁器			

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2117104
登録年度 30	登録番号 8

県道柳川筑後線関係埋蔵文化財調査報告

津島市遺跡

筑後市大字津島所在遺跡の調査
福岡県文化財調査報告書 第267集

平成30年（2018年）3月31日

発行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20